



## 私の所長時代を振り返って（和光大学総合文化研究所十年誌：1995-2005）（総合文化研究所の十年に思うこと）

著者	岡本 喜裕
雑誌名	東西南北
巻	2006
ページ	356-357
発行年	2006-01-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1073/00003370/">http://id.nii.ac.jp/1073/00003370/</a>

# 私の所長時代を振り返って

**岡本喜裕** 総合文化研究所第3代所長・経済経営学部教授

杉山康彦初代所長、水上健造2代目所長の後をついで2000年4月から2003年の3月末日までの3年間、私は和光大学総合文化研究所（以下、研究所という）の所長を務めさせていただいた。

この研究所は、研究所創立以前に存在していた「共同研究機構」を引き継いで設立されたので、それなりの基盤はあったものの、当初、運営上の規定は十分なものではなかった。

しかし、水上所長の時代に、多くの時間を費やし議論・検討がなされ、研究所規定が作成・施行された。それを引き継いだ私は、その規定に則り運営して行けばよかったので、大変ありがたかった。それでも、細部についての整備は私が在任中にしなければならない仕事であった。

先ず第1に、日本私立学校振興・共済事業団（以下、私学共済事業団という）に研究助成金を申請する際の選考基準を作ることであった。私が就任する以前、この選考と申請の手続きについては、ときの学長の考え方や運営委員会においてそのとき最も適切と判断されるものが候補にのぼることになり、一定した手順が規定されてはいないようであった。そのため、助成金受給の採択にむけて申請計画を戦略的に準備することがむずかしい憾みがあった。そこで、研究計画の応募資格が研究所のプロジェクトだけでなく学内すべての研究グループにあることを確認したうえで、その学内選考方法を検討し、学内の選考に当たっては、研究所委員会で選考した結果に全学の客観的な判断を求めるため、研究所委員以外の審査員（referee）を加えることとした。この考えを研究所委員会に諮り、了承を得たうえで、さらに三橋学長と協議を重ね、各学部から1名ずつ合計3名の審査員を選んで、研究所長と審査員の4名で判定することとなった。

第2に、「研究所ニュース」を発行したことである。和光大学の専任教員は、全員研究所の研究員を兼任しているが、それぞれの研究員や研究グループがどのような研究をしているかよくわからないので、定期的に少しでも研究活動の情報を提供したいと考え発行した。

第3に客員研究員の受け入れについてである。たまたま学外者、とくに外国からの客員研究員の受け入れについて要望があったが、既存の研究所規程で受け入れることには無理があった。そこで本学の諸規程ならびにいくつかの他大学の受け入れ規程などを参照し、研究所委員会で議論した。その結果、本学全体として客員研究員の受け入れに関する規定がないことが明らかになったので、大学全体として検討すべきとの結論を得た。このことを三橋学長に報告すると同時に、全学で検討していただくようお願いした結果、訪問研究員という形の制度を大学に設けることになり、その規程が追加された。(ただし、その後の検討により、研究所には独自の客員研究員細則が設けられた。)

第4に、研究活動を活性化し、研究成果を目に見える形にするため義務 (obligation) 付きの「重点研究」を設け、2002年度から研究費の傾斜配分を実行した。その成果は、東西南北・別冊03『アジア日系企業の人材育成』、同じく別冊04『アラビア海の文化誌』の形で出版された。

最後に、私見ではあるが、人文科学・社会科学系の私立大学では、多くの大学で専任のスタッフを置くことなく兼担で研究所の体裁を整えている。本来ならば学部の授業には携わらないスタッフを配置した研究所とし、研究に専念させ、その成果を世に問うことが望ましいと考える。いつの日か、和光大学において、このような制度になれば素晴らしいことと思う。

(おかもと よしひろ)